牛の首／噺

Bull head / The talk

雷羽

Ground Top
近代小説シリーズ

牛の首／噺

雷羽　著

Ground Top小説

「 牛の首／噺」

このファイルはサンプルです。
冒頭２ページが試し読みいただけます。
その他、内容が省略されていますのでご了承ください。
転載・配布は禁止されています。

〽あまさかる うつるものも かなしけれ そはひなもとの いのちつきらむ

牛の首

一　区比神社の神事

ある村で起きた、奇妙な話である。

清流が淑やかに流れる川が村央を流れ、周りには田畑が広がり、周りを山で囲まれている。北西から東南へ走る緩やかな谷に据えられた村。仮に言えば本元という地名だとしよう。本元の北側には北、そして北西には社前という地名で小さく別れている。

その村は、三つの山に囲まれていた。北から東へ覆うように曲山、西には忌当山（いむべやま）、南には南忌当山がある。この忌当山の頂上には区比神社があり、本元の脇を通る道から参道が繋がっていた。

江戸時代延享三年、本元では立て続けに奇妙な事件が起こり、村人を慄かせていたことがある。数日に一回ほど、忌当山から村人の変死体が見つかるのである。決まって男、しかも辺り一面に血が飛び散り、当の死体は服を引き裂かれたうえに腹から腑が引き摺り出され、その顔は何とも言えない形相であったという。初めて被害があって以来、村人は夕刻過ぎると外出しなくなった。しかしそれでも被害者は出る一方なのである。

そのうち、村では囁かれる噂があった。忌当山の区比神社に古くから伝わる行事である。女人禁制のその行事は、成人の男のみで執り行われ、春分と秋分の二回行われる。しかも参加した男どもは口が裂けてもその内容を話そうとしない。秘儀と言っても良いものだった。区比神社には宮司がいるが、巫も含めてすべて男のみで神事にあたっている。その神事が関わっているのではないかと女からは囁かれていた。それもそのはずで、発見された死体は、男だけが見ることを許されるのだ。なぜか女は発見者でも見ることは出来ない。

「おれ、見ちまったんだよ。」

若い男が二人、土手を歩きながらひそひそと話していた。

「何をさ。」

男が問うと、あたりをきょろきょろと見回しながら、手壁を作って小声にする。

「区比神社の神事をよ。」

「何言ってんだ、あれはおれ等が参加できん祭りじゃろ。」

鼻につけながら、笑う男。

「いやいやね、この前の春分の時さ、男衆が山つ登った後にこっそり抜け出してよ、どんなもんか確かめに行ったのさ。お前も呼ぼうと思ったが、何せ夜中のことさね、気兼ねしちまって。」

「んでんで。」

「ありゃ、神事じゃねぇ。鬼の祭りざね。」

血の気が引いたように、声を弱めた。

———暗い参道、蝋燭を灯しながら登って行くと、境内に出る。赤い鳥居、狛犬、年期のある社に、添うように祠がいくつか並んでいる。神木には注連縄がかかり、ジメッとした空気が立ちこめていた。境内の左右には道が続いており、神社向かって右へ行くと村が一望出来る崖がある。左に行くと神事が行われるという広場へ続いている。男は左へ進んだ。気付かれないよう、蝋燭の火を吹き消すと、一分ほどで明かりが見えてきた。息をひそめながら、近づいて行くと、高く積まれた枕木から炎が立ち、あたりは橙色に染まっていた。広場を囲む木々には注連縄が張られている。

男達が褌姿で炎を囲っている。褌以外何も纏わず、何かを待っているようだった。炎の前に神棚が組まれ、様々な賽物が備えられている。区比神社の宮司が神棚に一例すると、祝詞を唱え始めた。祝詞が読み終わると同時に、男どもは拍手を終え、しきりに体を叩く。すると奥のほうから巫が一頭の雄牛を連れてきた。抵抗無く引かれて、雄牛の手綱を柱に結びつける。男衆が牛の足下に杭を打ち付けると、それに牛の足を縛り付けた。太い声で鳴きながら暴れる牛。宮司は再び祝詞を奏上し始めた。

やがて男どもは褌に手を伸ばす。自らの前褌を擦りながら、牛を舐め回すようにじろじろと見据えた。牛の後ろに台を設置すると、一人の男がそれに上り、褌をずらして逸物を露にする。畑仕事で逞しく鍛えられた男らしい肉体、立派に聳り立った逸物に、男衆からは歓声が上がる。その声に応えるようにして腕を振ると、その逸物を牛の肛門に押し込んだ。雄牛の悲鳴が響く。暴れる雄牛も、足を縛られて身動きが取れない。影が炎に揺らめくなか、男は腰を振り出した。まるで人間と性交しているかのように、一心不乱に腰を前後へ揺すり、男は天を仰ぐ。雄牛の巨大な性器もまた、他の男衆が擦り上げて雄牛も男もまるで交尾しているかのような光景。そして雄牛が射精すると、それを器に取り、喉音立てて飲み干すのだった。祝詞を上げている宮司の装束を脱がして行く男衆。宮司の褌も膨らみ亀頭がはみ出している。

最初に行為を始めた男が雄叫びを上げ体を仰け反らせた。逸物を奥深くに押し込み、雄牛の中に射精したのだ。牛は相変わらず悲鳴を上げている。ずるりと引き出された糞だらけの逸物を、近くの桶で洗い流す。男が抜いた後も、すぐに他の男が逸物を押し込んで腰を降り始めた。数人が行為を終えるころには牛も鳴かず大人しくなった。男衆が何処からとも無く刃物を持ち出すと、それに水をかける。牛の下に回り込み、その腹に刃を突き刺した。さっきまでとは打って変わって叫ぶ雄牛。そのままザクザクと切り開くと、大量の血が男に降りそそいだ。同時に内臓がぼたぼたと落ちてくる。その時に肛門が締められたのか、肛門で行為をしていた男が叫び声を上げた。周りで見ていた男達は怒声歓声を上げたりして嬉々として見物している。雄牛の腹に潜り込むように立ち上がり、その体内を貪っている。血とともに落ちる内臓、牛は口から泡を出しながら、支木に体を垂れている。その間にも男どもは牛の肛門を代わる代わる犯し続け、ある者は牛の性器を切り取ってそこから滴る血を浴びるように飲み干す。もはや血祭りだった。白い褌も赤黒く染まり、農民の肉体もまた牛の血で染まって行く。浴びた血を滴らせながら、笑う男たち。その中には若者の父親もいた。そして祖父も。みな牛の肛門を犯しては、射精に体を反る。

最後の一人、宮司が祝詞を唱えながら雄牛を犯し、その肛内に射精を終えると、血だらけの男達が牛の周りに集まり出した。集りすぎていてよく見えなかったが、何をしたのかはすぐに分かった。

個人販売元

Ground Top　http://groundtop.sakura.ne.jp/
雷　羽　banji.jp@gmail.com

Printed in Tokyo, Japan. All rights reserved.

商品情報

販売価格：非売品
管理コード： df-492696wbvp_s
取扱種別：電子取引
発　行：2013年1月
販売者：雷羽
作成者：雷羽
販売元：Ground Top（http://groundtop.sakura.ne.jp/）
作成元：Ground Top（http://groundtop.sakura.ne.jp/）
連絡先：banji.jp@gmail.com
著作権：Copyright (C) Ground Top by LeiYu.

ZIP内容：
・ ushinokubi_pdf.pdf